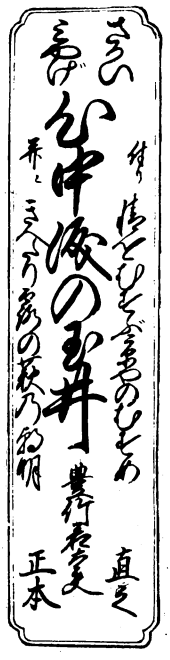

おはつ住吉參り道行

次第 教への道も秋津國。〳〵。ナホス 神の宮居に參らんと。フシ 實に世の中は。戀の秋。誰に緣の文月や十六七の女郎花。露を含みし面振りの。只繕はずぼんぢやりと。髮の結振り愚痴ならず。小オクリ びらり。帽子の端れより匂やかなりし眉の色。丸めし戀は是やらん。フシ 笠傾けて。還方此方の。人にや忍ぶ姿にて。伴をも俱せず連もなく。 フシオクリやう〳〵へ辿り北の端 フシ 並木の松に。風そよぐ。はつと裳の裏見せて。處體いぶかし如何とて抱へる帶を仕直しつ。身振り直すも艶かし。地 弓手に立ちし石塔はいとも畏き人寶の。標なりける色知らぬ。野路は淋しやせめてさて戯れ胡蝶の飛びつれて。歌 上りつ下りつ丸くなり。さも忙がはしく見えつるは悟氣か痴話か聞きたしと。ナホスフシ 人に問はれず。唯一人。心遣ひも身の上を少し慰む緣なり。西は海原渺々と。遠き山山氣疎くも。風に任せて走り船。みちは伊豫路か讃岐路か フシ 嗚呼儘ならぬ。この世界。わが魂はうか〳〵と。人目の繁き小笹原オクリ 露分け。もせぬ憂き苦勞鯨寄るべの浦なりとも。思ふ人どち暮すならほんに生きたる佛樣お阿彌陀樣もお心の。通らせ給ふものならば。兎に角早く我々が願を。叶へたび給へと。拜む心も徒らや安立町の荒神樣。地 夫婦の仲をよき樣にと傾く軒に夕顏の。歌 餘り淋しさに軒に瓢箪釣らせたりや。折しも風が吹いてあなたの方へからころひよ。こなたへからころひよ。からころ〳〵〳〵ひよつと瓢箪の釣らせたるは何より以て面白い岸の姫松 ナホスフシほの見えて。逢はぬ昔と逢ひ見て後と。思ふ思ひは思ふより思ひの外の思ひなり。まだお日樣の四つ時分。見上ぐる顏のまばゆきに扇翳して。見晴らかし嗚呼よい景とほゝ笑みて。鶇樫鳥色鳥の。差合なしに羽襖。歌 鳥の中にも比翼の鳥は〳〵。己ればかりが妻持ち顏に。羽打揃へて。合手〳〵露の時雨にナホス羽を浸し。己が儘なる其風情。ナウ 鶯子鳥と眺め捨て何處知るべはなけれども フシ 暫しが程も。住吉と。聞くに昔の相生に。千代に變らぬ松の色。友白髮なる壽は。誠に目出度き御神の堅き。誓ひや片削の石の鳥居の御前なる。

心涼しき水茶屋の。縁の端居に腰かけて暫く休らひへ給ひける。

フシ仇にはなさじ。一筋に交す契を繰言に。分くにも餘る糸筋の亂れ心に染色や。久兵衛とて譯知りの今年既に廿三。器量盛りや戀知りの情ある身は菱屋なる。地色おはつに深くあひめでの。二世を豫ねたる仲なれど。人目の關路繁ければ。心で知らせ目で知らせオクリ顔見るへ迄を樂しみに。月日を送りて。奉公もヲシうか〳〵勤め暮せしが。地頃しも盆の節季とて大阪表の商に。負箱負うてたど〳〵と誰に大江の岸なれや。松原に差しかゝり大明神を叩頭きて。脇目も振らず通りける。所に出茶屋の床よりも。ナウ久兵衛殿久兵衛殿ではないか。これ〳〵と呼び掛くる。久兵衛思ひ寄らねども立寄り詞コリヤお針の小よし殿か。ヤアおはつ様か是はマア見違へた。して何處へ行かうと思召し。御連もなく供もなく。又氣の變ること草の。地濡がな稼ぎに御心かと少し不興に見えければ。おはつはおろ〳〵涙にてエヽあた榮耀らしいわしが此中憂き苦勞。地海山にも譬うか京からは嫁入を。今月中に急がれよと醫者宗伯殿より急いでくる。そこで御針が智慧を出し。詞疝差出て氣むづかしい眩暈があつての腹痛のと。地色色々に紛らかしとくと養生なされてより。九月時分がようござらう左樣に思召されよと。色々挨拶しけれども宗伯ちつとも合點せず。どれ脈見ようとわしが手を。詞會釋もなく取つて見て。目鼻を蹙め是は扨。おなかに物言ひありさうな。身共は何になれとて斯うした事は召されたぞ。よしそれも分別あり拙者方迄呼びまして。只一服で下して捨て。そこでこそ氣色とも。地虚言も言はるゝものにてあり猶々急いで御仕度と。仁王の樣な顔をして歸られてから父樣や。母樣ぐるみ其上に。かね〳〵其方に言ふ通り。詞手代の彌次兵衛が意趣はある。さうこそあらうと存じたれ。其男めも知つて居る。扨結構なお娘御。菱屋の家をびしやりにして。御存分にて御座らうと惡口のありたけを。地底意地惡く言ひ散らせばあそこからも爰からも。鳥の囀る其如く言ひ立てられし時にこそ。スエテいつそ自害もせまほしく。百度。思ひ荒磯海。深き淵瀬に身を捨てようか。心の内は早鐘をつくづく思へばお主樣に。任せて置いた身ぢやものを兎角談合あらうもの。逢ひた見たさの憂き難儀樣子を問へば此中は。大坂へ行かんしたと地聞くになか〳〵たまられず。小よしにそつと牒し合ひ北の端なる稲荷樣。願を込めたる事ありとお針が衣裳を借り求め。コレ此樣な脇詰めて。行逢ふ迄と玉鉾の道知らねども念力の強

い心や通じけん。爰で逢うたる嬉しさや。右の通りの首尾なればマアどう思うて下さんすと延紙を涙に浸しける。詞久兵衛手を拍つて。先づ〳〵大い憂き難儀。地色皆私がなす業と。嬉し悲しう フシ 忝し。地扨々私はさうした事は露知らず。本町や伏見町堺筋の絹屋を廻り。三井の出店で糸など買ひ。それから天滿の天神様北野のお不動其外に。地色妙壽寺の鬼子母神藥王寺の七面。日親様迄立願し。地どうぞ願ひの叶ひまし此方と千代も友白髮。添ひます様にと色々の。心の内はもだくだと取亂したる白髮糸。解くに解かれぬ深紅の糸。どうして是がよかろうと差當りては分別もフシ溜息。ついで涙ぐむ。おはつ重ねて否これ延々の事でなし。これからなりと何處にぞ知るべもあらば退かんせや。そちの内でも表でも曾根崎の心中は。南へ移つて來さうな事兎角おはつぢや〳〵と。當事いふも病になる。いつそ死のなら諸共に一緒に殺して下さんすかどうぞ〳〵と身を寄せて涙に聲も上嗄れし。久兵衛打頷き詞ヲヽ、道理〳〵さりながら。今爰から立退きては商の算用なく。取逃げしたると取沙汰あらば惡事の上の恥辱なり。地色立つ鳥後を濁さずとや篤と物事埒明けて。扨又若い者共にも心ばかりの暇乞。又はこなたや身共等が行末迄の身祝ひに。夷島にて船遊び一獻汲んで祝ひまし。靜かに立退き申すべし。河内の國高安に親しき者の候へば。あれにてゆるりと添ふならば田舍も住みよかるべしと。待つが賴みでござるぞやこな様も今日は先づ早く御歸りなされませヲヽ、それよ。詞まだ大事の事忘れたり。さうして船で出ましたら。小よし方迄合圖して大坂屋迄來てどされ。わやくや紛れに退きませう。それはさうぢやが田舍住居が秋風でどうで男にや持ちやさしやるまい。入らぬものぢやと思へども。如何した事の因果やら。忘られもせぬ此戀と。互ににつと打笑ひサア北の樋迄送らんと既に立たんとする所へ。手代の彌次兵衛大脇差を横たへて。汗を流して韋駄天飛びに駈來る。おはつ見付けてそれまあ隱れさんせと言へば。久兵衛心得たりと負箱の。後に隱れフシ忍び居る。彌次兵衛程なく駈來り。詞これ大膽なおはつ様。何しに爰へどさつたぞ。内では旦那や御袋の大方ならぬ御氣遣ひ。ろくな事ではござるまいサア立たしやれと手を取れば。地おはつは兎かうの答なく。煙草盆引寄せて素知らぬ。顏の煙草。吹き出し〳〵他見して。久兵衛を見せまじとフシ北を眺めておはしける。地色彌次兵衛愈愈急いて來て。詞是なう爰なおどう様。申しても〳〵さりとは〳〵胴慾な。聞

えませぬと申さうかこなたに俺が首だけ。惚れて居まする其事は三年先から口説けども。遂に嬉しい返事もなく目を見合すも嫌さうに。何時も〳〵苦い顔道理かな〳〵ねつそりとした事慥へて。久兵衛めと腐合ひ子迄孕うでヲヽ結構ななされ様。地然し世の中に斯うした事もある習。若き故と云ひながら餘りと云へばひよんな事。詞あの久兵衛と言ふ奴は河内の穢多の伜ぢやげな。ヲヽまだそれよ總じて父は三病やみ。然らば孫を繼ぐなれば彼奴も躰て癇病が。しやつ面から熟んで來て荀子の様にならうもの。地其時でも抱合うて男ぢや敵ぢやと言れうか。笑止笑止と悪口を。フシするも一物思案あり。地久兵衛は箱の蔭より。聞いて堪忍ならばこそ。飛出んとは思へども言交したる言の葉を。無になす事も本意なしと。歯を食ひ締めて身を煩はし我身を。抱きて泣き居たる。おはつも顔は紅葉して胸に迫りて口惜しけれど。煙管で肩をそつと突き。詞彌次兵衛は何を言やるぞいの。地山の彼方のねすりどとアヽ聞きともない置いてたも。何であらうと餘所の事我身が苦にもならぬ事。今日は殊更御日和様よいにつけての氣慰み。俺は後から去の程に。そなたは先へ去んでたも頼むぞやいのと言ひければ。詞彌次兵衛ちつとも合點せずイヤ爰な徒人。こなたが主でなければの生けて置く人でなし。言葉柔かな内お歸りやと。眼にくわつと筋を立て。地それ駕々と呼びければ傍の出駕持ち來る。彌次兵衛腹も立つなれば値段もせず無理やりに。おはつを取つて押込み科人などをする様に。脇差の切刄を廻し。駕に引添ひ追立て急げ〳〵と逸散に。フシ埃を蹴立て歸りける。地後には久兵衛只一人溜息ほつとつくづくと後を見送り獨言。扨も〳〵口惜しや男たる身が今の程。あらゆる悪口言はれては死なねばならぬ首尾なれども。おはつに契約無になれば是は是非なき事どもかな。とは言へ傍の水茶屋にも。最前様子も見て居れば。腑甲斐なしとて笑はれん。生きて居られぬ身なれども此場は堪忍するぞいやい。己れ彌次兵衛め覺えて居れと。負箱背負ひすご〳〵と。しほ〳〵歸る有様は笑止にも亦。三重へ哀れなり。フシされば古語にも。言ふ如く。月に雲花に風初山藍の色にでし思に染むる袖の露。地おはつは宿へ歸りても。手業仕事も手に附かず。スエテしを〳〵として物思ふ涙を。襟に隠しける。地色お針の小よし立寄りて。コレ爰なお子。詞何をしく〳〵泣かしやるぞわしが呑込み居るからは。篤と後先よい様に心の儘に添しましよ。地其内人が氣を附ければ何事もむつかしい。

仕事がいやならコレ浮瑠璃本でも見さんせや。又煩ひの出ぬ様に御養生こそ肝心なれ。サア昔々を語らうかと フシけらけら笑ひ居る所へ。地夫婦の人は出で來り。ヤア爰な不孝者。詞親の許さぬ小夜衣浮名の立ちし此辛さ。此年迄ついしかに覺えぬ盆をすることは皆其方がさする事。地誠に世話にも言ふ如く指嶺しとて切られもせず。今より心をはらりと入れ變へ。京都へ往たらば隨分と。不作法不義のない様に今の悪名雪ぐべしナウ嗚さうではないかとあれば。地色母も共に成程〳〵言はしやる通り。必ず何もたしなみやと。スエテしみ〳〵と意見ある親の。心ぞ有難し。地おはつ暫く俯向いて。答なくして居られしがイヤ申し父様。詞さる山伏殿にわしが懈怠を見せたれば。京や大阪は相應ひで其儘親に離れうと。地懇に言はしやつたそれで京都は好きませぬ。變更えならうことならば京は止めにして下んせと。フシ手管を言ふも愚なる。地親爺大きに急き給ひ。そこなそげめ。扨憎い奴がある。さう拔かすも合點ぢややい。どうで汝が徒て行きとむないが一倍で。何の彼のと品付けて。親の難儀を顧ず未だ根性を直さぬか。地色扨も〳〵此年迄願うた後生も無にしくさる。サア是でも直さぬかと。柄差箒取り延べて二つ三つ打ち給ふを。母や小よしが取附いてコリヤお前様のが御道理コレはつ様。詞何故に上るまいと言はしやるぞマア旦那様奥へお入りなされませ。わしらが御合點行く様に篤と御意見致さうと。フシ様々宥め居る所へ。地色彌次兵衛は餘所より歸りしがつか〳〵と走り寄り。コレ旦那。折檻が甘うござる。三寸繩に括し上げ血反吐をお吐きやる首尾ならでは。地根性は直るまいと猶嗾くる心根は。フシ脇から見ても面憎し。地猶々親爺不興して。又振上げて打ちければ彌次兵衛見て。ヲヲそれでこそ〳〵さりながら私が心入れも候へば。先づ此方へと手を取つてオクリやう〳〵〳〵奥に入りにけり。フシ實に夕暮の。淋しきは秋ならねどもあるものを。暮るゝ思ひに彌増して。本フシ蟲の音弱る今宵しも。おはつは思ひますら男の悟る心も今はなし戀の奴に我は死ぬべしと。故事迄も身の上に尙し涙の種ならし。地かゝる折節久兵衛お針が手引に忍び入り。人の鼾も身に應へわな〳〵顫ふ其姿スエテいとゞ心のわくせきと。おはつは此方へと走り出で物をも言はず手を取つて。辛いやら嬉しいやら涙に。分けも知れざりし。稍氣息繼いで久兵衛。詞いとしぼや又折檻に逢ひ給ふと。小よしの傳へ聞くよりも。地色身もたまられず候へども。是非に及ばぬ仕合せなりさりなが

ら。詞内々話せし趣向の儀。明日に極めたり。愈々首尾を繕うて大阪屋迄來てざれ。地何事も〳〵必ず〳〵急くまいぞ。火水の中でも明日一日。爰さへ退いたら萱を夜。何程寢ようと儘ぢやものと。背中をとんと打ちければ。おはつは少し頬笑みて。ア、嬉しや何が扨さうさへならば身の本望。然らば此方も歸らんせ。ヲヲそんなら去なうか。ア、喧し。悪人方に見附けられ邪魔など入れば如何なり。可惜御見は惜しけれど末を楽しむばかりをと。スエナしと、打つ手を藏いて。同有難し添し先づ〳〵わしは歸らうと立ちければ。地名殘惜しげに袖扣へ。ア、明日の日が短かれ惜しいことぢやこれ斯うと。又抱き附き囁けば。ハテやくたいもなき急はしない。地黄丸で作つても。溜るまいとて打笑ふ深き。妹背は三重へ賴もしき〔此間に有上るべに一八袋あれ共略す〕

おはつ久兵衛河内へ道行

ハル言の葉。を糸で結びし。心こそ。戀といふ字の姿なれ。妹背を結ぶ糸屋なる情模樣や初姿。久兵衛諸共に茶屋の妓女衆に打紛れ。粋な姿にしやれ貝を。拾ふを誰に忍摺亂れ蒲をフシ搔き分けて。行末祝ふ夷島。色ゆゑ沈む河内路へ小オクリ締めつ。緩めつ手を引いて。あれは何ぞと白玉か問ひし昔の道芝も。色には胸の芥川フシオクリ流れて。へ早し年浪の立つ甲斐もなき。思ひ草忍ぶ心のフシたど〳〵と。背負ふぞ戀の重荷なる。遠からねども心急き急ぐばかりの月の足。三五の影も照り添ひて。桂の眉の。薄墨も。止めばや爰ぞ平野町御寺の舍人見返りて。挿頭の櫛や。引く浦に向ふは名にし。天滿宮。地此御神の古はなき名筑紫の浪の上。我は東へ行く程にフシ羊の。冷泉歩み斯くやらん。牛の聲聞く野外れを。直ぐに出づれば横雲の小オクリ棚引く。迄程あらん田面に早稻の秀でしも今ははかなきノ水の音。奥手は如何に添ひ果て、。枕並べん楽みと。や、物語重りて。歌思てどさるか河内へ行たら五年十年居ようと儘ぢや。さのみしみ〴〵歎かずと。歩ましやれ。先には鬼もないものと。勇め勇むりやそりやそもあろがよしや定めぬ世の中の。變るは常よ人心。賴まれじとは知りながら逢ふ夜〳〵の。睦言の。洩れて二人が。憂き涙干す暇もなき夜の道。哀れ較ぶる虫の聲深き思ひを蟋蟀たれ松虫のおとづれは。辛しや憎や妬ましと。桔梗が隈に湍れ渡る。裙も袂もしぼ〳〵と暗き心に月影は。冴え返りても木陰れの。榎の本に着きにける。地色かゝろ折しも内よりも定紋の提灯を。傍まばゆき燈し連れ。フシお初樣久兵衛殿

と呼び廻り。近附く聲にあたふたと榎のぐろに立隠れ。スエテ氣息を詰めたる切なさは半ば。心も消え入りし。地そこよ爰よと尋ね行く聲もこだまもやう〳〵と。程遠ざかり過ぎければ二人は嬉しく走り出で。扨も危し是よりは右手へ取つて道を變へ。少しにても急ぐべし目立たぬ樣に二人とも。いざ姿をも變へんとて。心用意の風呂敷にオクリ上衣をへ脱いで押包み。地身繕ひする其内に誰やら人のおとなひの。確にあれはと〻樣やか〻樣の御姿。見付けられては詮もなし逃げ隠れんと思へども。冴え返りにし月影に暫し隠る〻隈もなく。あたりを見れば折節の亡き魂送る捨薪。これ幸ひと打ち被き。オクリ氣息をへ詰めたるばかりなり。フシ行く道筋も。戀路より。地猶悲しきは子を思ふスエテ身の遺瀬なき世の中のフシ何處も。同じ親心闇ならねども迷ひ行く道の知るべを憂涙。あるにあられぬ姿なり。詞イヤナウかゝ。乳母が方へも尋ねさせ又絹屋町其外へも。定めて人は遣りつらんアヽ如何にも我等が出ぬ先から聞きましたが。あそこらへはけんによもなし何處の方に居る事ぞと。スエテ又繰返す涙なり。地斯くあるべきと知るならば憂き折檻はせまじきに。言うて歸らん事ながら。憎しと思ひ色々と。辛くも當りし事どもかと思ひし故に斯く成りて。フシ何とかすべし悲しやと。涙に道も見え分かず二人が隠れし姿をば。乞食なりと心得て詞ヤレそなた衆よ。只今にても先にても十七八の女房と。廿三四の男。此道筋は行かざるか。地其聲だにも聞きしかば教へてくれよさりとては。世に賴りなき老の身の子を失ひし力草フシ枯果て。なんとばかりなり。地色彼等が體を見るにつけ。嘸や二人の者どもが宵よりして宿もなく。野路に迷ひつ山に行き。あの身につゆも變らじな嗚呼さて若き心から。色故浮れ出で迷ひ斯く迄思ひをかくるぞと。むせ返り〳〵。泣くより。外の事はなし。地此道筋へも來たらずばとても出でぬる上なれば。萬代の方をも尋ね見んヤレ方々よ。詞若し跡へ來し面影の見えたらば。地必ず止めくれよかしと。母は暫く立留り珠數袋より鳥目少し取出し。二人の行方まめやかにと。祈る心の施しをフシ受けぬも今の身にあはず。差出す手もたよ〳〵と。包み兼ねたる涙をも押隠し。〳〵哀れと。見ゆる姿をば。地夫婦の人はつゆ知らず。扨もやさしの有樣や。人の憂を身に請けて。歎く心かさらばフシさらばよと。立別れ行く後影。是ぞ親子の別れとは後にぞ思ひ知られたり。神ならぬ身のはかなさよ。今は包むに包まれず姿あらはに立出でてナウ淺ましや色故に。斯

く成り果つる我々を親の慈悲とてあの如く。尋ね迷はせ給ふ事冥加に盡きて行先も。思ひ知らるゝ悲しさよ。地此正月の御着物わしが仕立てゝ居る所へ。詞かゝ様のござりまし。桁丈袖も必ずと少しにても用捨しや。皆そなたの物ぢやとて。地末の事迄思召し。御年の寄るはのたまはてわしが事ばかりにて。暮させ給ふ御心入。如何して是が送られん。申せば今が生別れ。これなうとゝ様母様と草にひれ伏し身を喞ちせき入り。せき入り歎きしは理せめて哀れなり。ナウ久兵衛殿。詞常にこなたの言はんす如く。書いた物で現はるゝ粗末にするなと言はしやる故。皆引裂いて焼いて棄て。地わしが書きし物とては小遣帳があるばかり。定めて定めて母様の。はつが形見と見る度に。歎き給はん悲しやと。しどもなき事繰返し涙にくれて居たりける。地色男も暫し涙ながらわざと言葉を荒らかに。詞さのみな歎き給ふまじ死し果つる身にてはなし。河内へだにも行くならば。地又御夫婦へ必ずも廻り逢ふ間は今ぞかし先づ先づ暫しも急ぐべしと猶も心は細道の。並ばれぬまを手を取つて月の影さへ跡先に。繁り大木のほの暗く色オクリ草のへ葉末も見えわかず。地先に進みし久兵衛野面の井戸にどうど落ち。はつと言ふ聲に驚きて女心の悲しさは。遣る方もなき身の行方。如何ならんと思へども聲を立てなば程行かん。追手の者や立歸らんアヽ悲しやといふ内に。女はせめて心つき撥釣瓶をともがけども。力に叶はぬ詮方なさ。さのみは深くもあらじをと帶を纏ぎ足す抱帶。やう〳〵に結び下げ。詞コレ久兵衛殿これ〳〵と。帶を下せば取付いて。拗いとほしや我故に幾許の物思ひ。假令取付きたればとて如何で女の力にて。引上げられぬやうもなしと。地涙にむせぶ其聲も次第に弱る悲しさよ。地色おはつも今は氣も亂れさて情なき世の中や。人目を忍び身を忍び親はらからの氣に背き。添ひ果てん故にこそ。斯く迄心を盡せしに今の難儀は何事ぞ。神や佛はなき世かや。恨めしの我身やとひれ伏し。歎き居たりしが。地弱る思ひを取直し。南無や天滿大御神力を合せ給はれと。念力に引く縁の帶。假令千曳の石なりともとかひがひしき言葉にぞ。男も少し力を得。互に聲を掛合せえいや〳〵と水際を。半ばは離れ上りしが女力の手弱さに。しかも男の身は重し帶はふつつと切れ離れ。どうど落つれば初めより猶底深く沈み果て。ばつと立ちぬる水煙ッシ今は姿も見えわかず。おはつは暫し氣も消えてナウ悲しやと倒れ伏し。足摺をしつ身を悶え。焦れ歎きし涙には野邊の。千草も。枯れぬ

べし。男やう〳〵浮上り。洞扨も是非なき世の有様。戀故にこそ主命を暫しも背き名を捨てゝ。フシ此儘果てん悲しさよ。地色さりながら御身は是より引返しお二人へも斷り遂げ。必ず京都へ嫁入し行末長くおはしませ。地思し出する折々は念佛申して給はれや。アヽ苦しやといふ聲も弱り。果てぬる有様に。女も今は思ひ切り。二世とかねたる身を離れ生き存らへて何かせん。とゝ様やかゝ様も色故親の名をくだす。不孝の科は許してたべナウ我夫よ待ち給へ。未來も一つ蓮ぞと手を合しつゝ筒井筒。昔男のいにしへに變る二人が最期ぞと。思ひ切つたる煩惱の絆を結ぶ帶の端。手に持ちながら南無阿彌陀。南無阿彌陀佛助け給へと飛入りしはフシためし少き最期なり。セメ夜明烏の聲々にかはい〳〵と告げ渡るゆかりゆかりの涙川此玉。の井にとゞめたり。

豐竹若太夫　正本

右本者依此懇爲望文句音節
等悉校合加秘密令開版者也

大阪上久寶寺町三丁目
正本屋九左衛門　開板